

同志社大学国文学会二〇〇一年度彙報

田中康之（大阪府高教教文部長）

総合学習 —— アグネス講座の試み ——

大野純子（平安女学院高等学校教諭）

今、目の前の生徒は —— 意識と行動 ——

詫磨秀雄（西淀川高等学校教諭・高生研全国常任委員）

〈新人生歓迎会〉 学生会主催

二〇〇一年四月七日（土）紫苑館食堂

〈国文学会総会・研究発表会・講演会〉

二〇〇一年六月一七日（日）寧靜館会議室

・総会

・研究発表

平家公達草紙と隆房卿艶詞絵巻

—— 擬されるはなぜ隆房か ——

小林加代子（大谷女子短期大学非常勤講師）

言語史の一面

石井久雄（本学教授）

・講演 パネルディスカッション

二一世紀の教育を求めて

—— 学校・生徒の現実を見据えつつ ——

総合司会 加藤昌孝（同志社香里中学校・高等学校教諭）

公立校の現状 —— 新教育課程の問題点 ——

〈秋季研究発表会〉

二〇〇一年二月一六日（日）寧靜館会議室

・研究発表

『万葉集』の人麻呂歌集旋頭歌における表記

田野順也（本学大学院博士課程前期課程）

『源氏物語』の辞世歌—— 浮舟詠歌を中心に ——

秀島さおり（本学大学院博士課程前期課程）

「的」の意味用法について

梁高峰（本学大学院博士課程前期課程）

〈講演会〉

・田口律男先生講演会 院生部会主催

「都市」のターミノロジー

二〇〇一年一月五日（月）明徳館会議室

・中島らも氏講演会 学生会主催

ギャグに弱い日本人——日本語を話すわたし——

二〇〇二年一月九日(水) 弘風館三二番教室

二つの講演会について、詳細が『国文学会会報』第二十九号にある。

〈同志社国文学〉

第五十五号 二〇〇一年二月二十五日発行

収載論文七編

第五十六号 二〇〇二年三月二〇日発行

収載論文七編

〈国文学会会報〉

第二十九号 二〇〇二年三月二〇日発行

二〇〇一年度修士論文題目

『源氏物語』浮舟の夢

——浮舟の和歌をめぐって——

顕昭の万葉集

——『袖中抄』を中心に——

『的』についての考察

——近現代日本語を中心に——

シテシマウの多義的意味と本質

——パーフェクト性を中心に——

二〇〇一年度卒業論文題目

『古事記』の倭建命の西征について

——その名前を中心に——

巻二相聞の展開

——贈答と独詠をめぐって——

天智天皇挽歌群の形成と意義

——女性達の挽歌——

大伴坂上郎女の「怨恨歌」の考察

——『萬葉集』卷十七・三九〇九——

三九一三番歌について——

『日本靈異記』「狐女房」考

秀島 さおり

景井 詳雅

梁 高峰

鈴木 美和子

石川 礼子

瀬川 夏奈恵

松藤 薫子

石尾 由季

佐々木 望

神戸 美沙

『日本靈異記』中巻第十三縁

「猿沢の池」の伝説

『落窪物語』の特質

『落窪物語』における継子いじめ

「枕草子」の景観と清少納言の視線

——平安京と四郊——

『枕草子』蟻通明神考

『枕草子』蟻通明神伝説の難題をめぐって

『源氏物語』の花と三人の女性たち

——桐壺更衣・藤壺の宮・紫の上——

『源氏物語』梅枝巻にみる薫物合せ

——浮舟との関係から描き出される貴公子  
とそれぞれの「想い」について——

『虫めづる姫君』における笑いと風刺

『狭衣物語』の風景

『江談抄』吉備真備考

僧伽羅国伝説の受容と『今昔』的生成

『今昔物語集』における山陰中納言説話

『今昔物語集』「平中」考

『今昔物語集』巻二十四第一二十四話考

『今昔物語集』業平説話考

——『伊勢物語』との比較から——

『今昔物語集』巻第二十五第七における

藤原保昌の「兵」的性質に対する認識

『今昔物語集』における「狗」

『今昔物語集』「芋粥」考

『今昔物語集』における女性の運命

——巻第三十第四、第五をめぐって——

『古本説話集』「曲殿姫君事」

——『古本説話集』の個性——

『梁塵秘抄』の女性達

『とりかへばや物語』の方法

『とりかへばや物語』の考察

——四の君をめぐる「女」の不幸——

『発心集』における鴨長明の思想

『北野天神縁起』の構成

『宇治拾遺物語』冒頭話の解釈とその意味

『宇治拾遺物語』「尼地藏奉見事」考

『宇治拾遺物語』第八十六話「清水寺二  
一二度参詣者、打入双六事卷六の四」考

小瀧 貴洋	緒方 夏子	片山 彰子	盛江 直美	山田 恵	山田 里佳	生駒 千香	齋藤 文香	酒井 光世	中澤 ルミ子	住田 実詠子	斎藤 裕美	佐藤 公治	木ノ下 千栄	岡田 聡子	平木 裕子	酒川 千恵	秋山 容子	木村 紀子	横山 沙織	榮居 幸江	岡山 高博	田中 奈津子	田原 優子	宮川 悦子	池永 美恵子	小上 愛	芝丸 あい子	伊藤 途季子	佐尾 希	白数 由紀子	國府 祥子
-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	--------	------	--------	--------	------	--------	-------

『宇治拾遺物語』 第八十九話

「信濃国筑摩の湯に観音沐浴の事」考

大西 祥太郎

『宇治拾遺物語』 第九十二話「五色鹿事」考

北谷 亜矢

『宇治拾遺物語』 第九十六話

「長谷寺參籠男、預利生事 卷七の五」考

竹内 陽子

『宇治拾遺物語』 「信濃国聖事」

松本 俊宏

陽成天皇の伝説

藤本 恵理

『宇治拾遺物語』 をめぐって

山田 理恵

『平家物語』 の義仲像

門屋 敦

『平家物語』 における重衡

田中 裕紀

重衡救済物語の象徴性

田中 裕紀

『平家物語』 建礼門院説話試論

田中 裕紀

——物語終結部における 建礼門院像の再考——

田中 裕紀

『沙石集』 梵舜本卷第八における笑話考

加美 甲多

——「児ノ飴クヒタル事」を 中心として——

加美 甲多

物語に登場する鬼の考察

辻野 拓也

祇園祭の祭祀と物語

岡本 明子

——北観音山と南観音山をめぐって——

岡本 明子

枯山水における思想性と芸術性

利部 麻衣子

能『蝉丸』にみる演出の変遷と身体表現

弘田 一恵

——金剛流の場合を中心に——

能『経正』における修羅の苦患の意義

上杉 晴香

利生譚としての能『三井寺』

東 由加里

『酒呑童子』考

岩井 敦子

信太妻文芸における異類婚姻譚の考察

田畑 知里

『信長公記』から『信長記』へ

田中 大介

——記録文学から 軍記文学的方向への展開——

「ためしもなきよみがえり」にみえる

益満 ます

西鶴の創作について

益満 ます

《西鶴女性考》

岡本 幸子

——「ばけもの」的「女の魔性」——

岡本 幸子

近松門左衛門の世話物の世界

神保 力也

——一分をめぐって——

神保 力也

『女殺油地獄』論

池田 順子

——与兵衛とお吉をめぐって——

池田 順子

『源五兵衛おまん薩摩歌』における登場

平岡 透

人物の作品に与える影響と役割について

平岡 透

『心中万年草』における母の存在

稲浦 恵

——富藤とアイロニー——

稲浦 恵

『心中宵庚申』における心中の意義

——半兵衛とお千世の形象を中心に——

橋原 杏子

作品・家庭環境から導き出される

鈴木三重吉の特性

中平 康志朗

『津国女夫池』における

五段目「松」をめぐる

橋本 理史

『袈裟の良人』

中助助「銀の匙」についての制度の考察

上田 真司

——「忠臣蔵」と「享保の改革」——

長井 真理子

——実在の僧たちと

菊地寛のオリジナリティ——

安藤 佳奈

『冥途の飛脚』と改作の変遷

塩冶判官像の変遷

小西 桂子

夢野久作『ドグラ・マグラ』論

——「時計」という機械を

中心として——

三好 弘晃

信仰される由来を語る黒本・青本

——『新版鐘銘道成寺根元記』と

『柿本人麿明石松蘇利』——

戸川 郁子

西條八十と色彩について

芥川龍之介「蜜柑」論

——私小説「観を中心として——

遠藤 健二

『誹風柳多留』の子どもたち

近代日本文学』と 近代日本語、

あるいはその政治性

大澤 聡

芥川龍之介「妖婆」論

——小説スタイルに

こだわり続けた大正八年——

村上 宜嗣

神話』としての『それから』論

樋口一葉『やみ夜』と『十三夜』

——『文芸倶楽部』閨秀小説号を

中心に——

水上 富美子

「人でなしの恋」における

——その人形愛——

門野と乱歩の両義性

花田 理加

夢幻の鏡

——泉鏡花と夢野久作に関する

ディスクール——

植田 彩

——すがたは語る——

中澤 亜佳根

中河與一「天の夕顔」論

——昭和十年前後の文学論争における

「通俗性」「偶然性」をめぐって——

林芙美子 時代背景と作者

——十五年戦争下における

林芙美子文学への影響——

石川達三『生きてゐる兵隊』試論

——脱・石川達三を指して——

坂口安吾「不連続殺人事件」

——推理とその文芸性に関して——

坂口安吾「夜長姫と耳男」について

——探偵小説、アンデルセン童話  
からのアプローチ——

坂口安吾における他者について

「虎狩」論

——中島作品史におけるその位置——

草稿「権狐」と定稿「こん狐」

『陽気な地獄破り』

——昔話から民話劇まで——

昆曲『夕鶴』の人々

『海と毒薬』

——遠藤周作の思い——

司馬遼太郎論

——歴史小説の方法——

安部公房『他人の顔』

——現代社会を映し出す顔——

安部公房の変形譚

『仮面の告白』論

日野富子は悪女か否か

——永井路子『銀の館』をめぐって——

野坂昭如、死の思想。

大阪砲兵工廠の「アバッチ族」

——『日本三文オペラ』における  
オリエンタリズム——

「ことばあそびつた」の試み

——谷川俊太郎の場合——

井上のキリストの受難劇

物』としての死者

——戦後世代、そして私たちに  
とつての「死者の審り」——

『杏子』論

——他性をめぐる杏子と彼の物語——

宮本輝「螢川」論

——錯綜する業と縁——

二宮 有紀

竹入 奈津子

金丸 亮太

安達 正芳

川崎 直子

加藤 昌義

荒木 裕一

吉野 友佳子

松井 賢

元安 達也

深谷 理恵

戸畑 妙子

風の歌が聴こえた——『ノルウェイの森』論

——『直子』をめぐる物語の

「リアリティ」と「喪の作業」——

「風の歌を聴け」論

——アメリカの影響・時代を通して——

村上春樹「蜂蜜パイ」論

——再生への意志——

『羊をめぐる冒険』

——大切なものを見失わないために、

村上春樹の優しさ——

李良枝と母国とのつながり、

そして、その表現

山田詠美の「少女論」

——『蝶々の纏足』を中心に——

辻仁成の研究

——「ジンセイ」と

「ヒトナリ」を通して——

ユートピアを求めて

——装置「島田雅彦」による

自己差異化——

吉本ばなの文学

——『キッチン』を中心に——

観智院本『三宝絵』の用字法

——形容詞における諸相について——

寺山修司の短歌とその方法

週刊誌グラフィアの文章における比較考察

現在のファッション誌における表記の特徴

同志社大学体育会ボウリング部における

呼称・敬語の調査

「駄じゃれ」を考える

動詞連体修飾表現について

——状態動詞になる表現を中心に——

助詞「は」と「が」の機能に関する考察

敬意表現習得の場の実際

京都市方言の共通語化について

兵庫・岡山県境地域における方言動向

窪田 恵理奈

青木 常晃

尾越 まり恵

太田 文代

山田 さやか

今村 広巳

澁谷 里美

品田 憲吾

荒井 明子

碓井 由起子

富谷 俊輔

宮坂 拓

沼田 五月

米澤 久美子